

【問題】(演習)

出典：『俊頼髓脳』／オリジナル問題

現代語訳

能因法師は、和歌を（話題にする時）も、うがいをして申し、歌書集などを（見る時）も、手を洗って（から）取り広げたそうさだ。ただ、（単に思いつきで）ちょっとしているのかと思っていたけれど、讃岐の前司兼房と申し上げた人が、能因を、牛車の後ろに乗せて、どこかへ行った時に、二条通りと、東洞院通りとの交わる場所は、（その昔、歌人の）伊勢の家であったが、子日の小松があったのを、先端の枝を結んで植えていたが、生長して、実に大きな松であったが、（その）木の梢が見えたところ、（能因は）牛車の後ろから、慌てて下りたので、兼房の君は、わけがわからず、「何事ですか」と尋ねたところ、（能因は）「この松の木は、高名な、伊勢の結び松ではございませんか。そのような（和歌に因縁のある）松を、どうして、牛車に乗ったまま通り過ぎてよいでしょうか、いやよくありません」と言って、はるかに（遠くまで）歩き離れて、（その松の）木の梢が隠れる距離になって、牛車に乗ったそうさだ。また、右近の大夫国行と申した歌人が、陸奥の国に下った時に、歌人が集まって、饞別をしたが、（ある人が）「白河の関を通り過ぎるような日は、水で鬢（＝髪）のほつれをかきなで、打衣などを着て通り過ぎよ」と教えたので、（国行は）「どういうわけで、そのようにしなければならぬのか。その国の人が、集まって見るのか」と尋ねたところ、「どうして、あの能因法師が、『秋風ぞ吹く白河の関』と、詠んだような関であつては、日常だといって、鬢をけば立たせたままでも通り過ぎなさってよいだろうか、いやよくない」と言ったので、人々は笑ったということだ。そうはいっても、「もしこの和歌の道に専心しようとお思になるならば、そのようにして（はじめて）、（よい）歌を詠むことがおできになるだろう」と申し上げたそうさだ。だから、この和歌の道に専心するような人は、たとえ末世であるとしても、（これらの逸話を）慎んで受け入れなければならないのであるようさだ。

問 1 (ウ)

問 2 髪を整え、打衣を着て白河の関を通り過ぎること。

問 3 たち

問 4 (オ)

問 5 能因法師が歌を詠んだ場所とはいえ、白河の関を越えるのにわざわざ身なりを整えるのはおおげさで、滑稽に感じたから。

〔解答例〕

問 6 (6) || (イ)

(7) || (エ)

問 7 (イ)

出典：『俊頼髓脳』の一節（一部改変あり）／ 聖心女子大学

現代語訳

昔、ある親が、二人の子を持っていたのだった。この親が死んでしまった後、(二人の子の)親を恋い慕い悲しむことは、何年たっても(変わらず)忘れることはなかった。昔は、死んでしまった人は、墓に納めたので、親が恋しくなるたびに、兄弟と一緒に、その墓のところへ出向いて、涙を流して、自分自身の心配ごとや悲しみを、生きている親などに向って言うように、語りかけては帰るのだった。(ところが)兄の方は、年月が経過し、宮仕えをしていて、私事(＝親への追慕)をふりかえってみると、耐えきれない気持ちになって、心の中で思ったことには、「このままでは、自分の心を慰められそうもない。忘れ草という草が、人の思いを忘れさせてくれるそうだ」と思って、忘れ草を、親の墓のそばに植えた。その後、弟はたびたび訪れて、「いつものようにお墓へ参りませんか」と誘ったけれども、(兄の方は)何かと都合のつかないことが多くなって、一緒に行かないようにはかなくなってしまったのだった。(そこで)この弟の方は、(兄の態度を)たいそうつらいことだと思つて、亡き親を恋い慕い申し上げることに専念して、日を暮らし、夜を明かして、「私だけは、親を忘れ申し上げまい」と思つて、「紫苑という草は、心の中で思ったことは忘れようとしても忘れられないそうだ」と思つて、紫苑を、墓のそばに植えてみると、いよいよ(親を)忘れることはなくて、いつまでも墓に詣でていたそれを見て、墓の中から声が出て、「私は、お前の親の屍しかばねを守る鬼である。どうか恐れなくてほしい。あなたを守ろうと思う」と言ったので、恐る恐る聞いていると、「あなたの親への孝心あることは、年月がたつても、変わることがない。兄さんの方は、同じように恋い慕い悲しんでいるように思われたけれども、「思ひ忘れ草」を植えて、そのききめがあった。お前は、紫苑を植えて、またその結果を得た。(あなたの親への)思いは心がこもっており、同情を禁じえない。私は、鬼の容姿ではあるが、物に感ずる心がある。また、その日の出来事を、予知することができる。(私が)予知することがあったら、夢をもって知らせよう」と言つて、声はやんで、そして、その後、その日のうちに起るはずの出来事を、(弟は)必ず夢に見るようになった。

この故事を聞くと、紫苑は、嬉しいことのある人は、植えていつも見るべきである。心配事のある人は、植えてはならない草である。

解答

問1 (1) 語りかけては帰るのだった。

(2) いつものようにお墓へ参りませんか。

(3) 何かと都合のつかないことが多くなって、

(4) 一緒に行かないようにはかりなってしまうのだった。

問2 (a) ㉠(エ)

(b) ㉠(ア)

問3 親

問4 亡き親を決して忘れないままでいること。〔19字・解答例〕

問5 植えるべからぬ草なり↓植うべからぬ草なり

問6 ① ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

解説

問1 傍線部の口語訳問題は、傍線部をまず品詞分解し、それぞれの単語の語義、用法を思い浮かべる。その過程で重要度の高いもの、さほどでもないものを浮かび上げらせ、出題者の狙いはどこにあるのかをチェックする。その次に、傍線部が文脈上どのような位置にあるのか、文のつながりぐあいを見る。言葉は、ばらばらに用いられるものではなく、流れのように、互いに結びついて相互に影響しあっているものだからである。特に傍線部の前からのつながりを正しく把握することが大切である。このように、品詞分解によるミクロ的な視点と、文脈を捉えることによるマクロ的な視点とが、うまくバランスをとったときに正しい解釈と表現がでるものである。

(1)の品詞分解では、「つつ」の訳し方がポイントとなる。「つつ」は、動詞と動詞をつなぐ接続助詞であり、「つつ」の上下の動

作をみて、それが同時に行えるならば、「二つの動作の同時進行」と見て「しなから……する」と訳し、時間的経過が認められるならば、「反復」と見て「ししては……する」と訳す。そして、上下の動作の反復が連続して行われていれば、「継続」と捉え「ずっとし続けて……した」と訳す。傍線部(1)では「親の墓に向かって」いひつつ帰り……だから、「口に出して言っでは帰る」と読み取るのが妥当だろう。

次に、文脈上の位置づけだが、「いひつつ帰り……」の主語はどこにあるか探してみよう。すると、前の行の「兄弟」が該当することがわかる。さらに文脈をたどるとすぐ次に「うち具しつ、かの塚のもとにゆきむかひて、」とある。この箇所も基本的には同じ構造をもった文である。用法も同じ「反復」と考えられる。そうすれば、さらに前行「年をふれども忘らるることなし。」とあるように、兄弟が長年にわたって親の墓参りを続けていたことがはつきり浮かんでこよう。兄弟は、長い間、いつも墓に向けて語りかけては帰るといふ日々を送っていたのである。登場人物の役割・立場などを理解した上で、もう一度、品詞分解によるポイントを組み合わせて表現を整える、これが現代語訳の方法なのである。

(2)を品詞分解すると、「れいの／御墓／へ／や／まゐる」。係助詞「や」はここでは疑問を表し、「まゐる」が結びとなっている。「れいの」は単語としては分けたが、事実上一語のように機能する連語である。体言を修飾する場合は、現代語と同様で、たとえば「例の話だが……」「例の一件については……」というふうに使われる。用言を修飾する場合は、「いつものように」と訳す。たとえば、「御前近くは、例の、炭櫃すすびに火こちたく熾おこして、……（『枕草子』）」という場合、「例の」は「熾こして」を修飾すると考えて、「中宮様のおそば近くには、いつものように、炭櫃すすびに火をたくさんおこして」と訳すのである。「例の」がどの語を修飾しているかで識別する。

文脈の面から考えてみよう。二行ほど前に「兄の男、年月つもりて」とあるところから傍線部(2)の直前「萱草を、その塚のほとりに植ゑつ。」までは、兄の心境の変化を述べるくだりである。その文を受けて、「そののち、弟つねにきて、『れいの御墓へやまゐる』とさそひけれども、」とあるわけだから、これは、墓参りに対して消極的になった兄を、熱心に弟が誘っている言葉なのである。そう考えるならば、「例の」が連体修飾で「例の御墓へ」と解釈するよりも、連用修飾と考えると「いつものように御墓へ参りませんか」と解した方が自然である。また、疑問文「やまゐる」の訳し方にしても、勧誘のように表現した方がむしろ正しいことが実感できるであろう。ここは、文法的には疑問ということにして、表現では勧誘を意識すればよいと考えられる。機械的な訳に落ち入らないことが大切である。念のために付け加えておくが、文法は用例や用法をもとに組み立てられ体系化されてきたも

ので、古人は、文法を勉強してから作文をはじめたのではない。文法と文脈とのバランスに気をつけよう。

(3)は「障りがちに／成り／て」と品詞分解できる。「〜がち」は単語ではなく接尾語。名詞や動詞の連用形に付き、「そうなりやすい」、「〜が多い状態である」の意を表すので品詞分類上は「障りがちに」までを一語のナリ活用形容動詞・連用形と考えておく。「障る」は、何らかの原因で事が妨げられそのまま連ばない意である。漢字で表わした通りである。そこで、傍線部(3)は「さしざわりあることが多くなつて」といった意味が浮かんでくる。

文脈の面から考えてみよう。「さほりがち」になつたのは兄の方である。兄の身边に起こつた出来事をたどつてみると、前にふれた4行目からの「兄の男、年月つもりて萱草を、その塚のほとりに植ゑつ。」に原因があることがわかる。兄は「おほやけにつかへ、(＝宮仕えをしていて)」という立場であることが書いてあるから、公務を口実にして都合がつかないといつて弟の誘いを断るようになっていったものと思われる。このことを考え合わせた上で解答を作成する。

(4)は、品詞分解をすると「具せ／ず／のみ／なり／に／けり」となる。「具せ」はサ変動詞「具す」の未然形。「具す」は、本来、漢語「具」にサ変「す」がついてできた複合動詞で、「具」の字義「そなえる」「そなわる」の意が、和語化することによって「連れ添う」「伴う」「携帯する」などの意が生じた。「のみ」は副助詞で、限定・強調の意を表す。「なりにけり」は、意味として一つのみとまりを持つもので「なつてしまつたのだつた」の意。「なり」は動詞「成る」の連用形、「に」は完了を表す助動詞「ぬ」の連用形である。そこで、傍線部(4)は「連れ添うことのない状態にばかりなつてしまつたのだつた」という直訳に一応、置きかえることができよう。

文脈の面から考えてみると、傍線部(4)の前の行にある「そのち、弟つねにきて、『れいの御墓へやまゐる』とさそひけれども、……」を受けて「具せずのみなりにけり」のあることがわかる。そうすると、「弟は誘つたけれども、(兄は)……」という流れの中で傍線部(4)の表現を考えれば、「(弟と)一緒に行かないようにはかりなつて……」と訳せるのである。動作主(＝主語)を文脈上に想定すると訳しやすくなる。これは古文読解の上で特に重要な読解法の一つであるといえよう。

問2

口語訳の問題で、選択肢式のもの。こうした問題では、単語の知識をうわべだけでなく深く知っておくことが求められる。字面だけでなく、語義をしっかり捉えるようふだんから心がけよう。

(a)について。「かかり」は動詞「かかる」の連用形であろうことは察しがつく。ただ、「懸かる(掛かる)」の他に「斯かり(＝

このようにし「て」という読み方をするかもしれないが、これは選択肢に該当するものが見当たらないので排除できる。「懸かる」は、かかりきりになる、といった意で現代語にも「とりかかる」という語があるので類推できよう。文脈から傍線部(a)を見ると、同じ行に動作主「この弟の男」がある。また、すぐ上に「この人を恋ひ申すにこそ」とあり、「恋ひ慕い申し上げること」にかかりきりであって、と解せる。また傍線部(a)を「日をくらし、夜をあかしつれば」にかけて読むと、「弟が親のことを恋ひ慕い申し上げること」にかかりきりで日夜過ごしていた」となって文意が通るのである。選択肢には「懸かる」の単語としての意味ならば(a) (エ)それぞれに用例文があつて辞書にも掲載されているが、「かかりて、日をくらし、夜をあかし……」のように後文へ続けて文脈を整理したとたんに解答が浮かび上がってくるのである。(ア)「とりかかつて」日をくらし、夜をあかし……はおかしい。(イ)「関連して」も(ア)と同様不自然である。(ウ)「頼りにして」は、一見後文へうまくつながるような気がするかもしれないが、前文「この人を恋ひ申すに(＝親を恋ひ慕い申し上げること)」からのつながりがうまくゆかない。(エ)「専念して」は、いいかえれば「かかりきり」ということであるが、これのみが、前文からのつながり、後文への自然なつぎ方となっているといえる。なお、傍線部(a)直前の「こそ」は係助詞で強意であるが、いわゆる「結びの流れ」となっている。

(b)について。この場合「そこ」は現代語によくある場所を指し示す代名詞ではない。人称代名詞である。自分と同等かそれ以下の人物に対して軽い敬意や親愛の気持ちをこめて用いられた。おまえ、きみ、あなた、などといった現代語の語感に近い。文脈の上からみると、「我はそこの親のかばねをまもる鬼なり。」とあるから、お前の、または、あなたの、と訳せよう。該当しない選択肢は「場所」で捉えた(エ)や、「底」と解釈した(イ)。また(ウ)のように「その子」を「そこ」と略すことはない。場所を示す代名詞は、古文では人称代名詞に転用されることが多いのだが、よく考えてみると現代語の人称代名詞のなかにも「あなた」のようにもともと遠称の場所を示した指示代名詞が転用され、用いられているのである。

問3 指示語の内容を具体的にし、文中の語で答える問題。指示語をつかむ問題のほとんどは、文脈を前へ前へとたどることによつ

て見つかることが多い。この場合は傍線部(5)「この人」を恋ひ慕う動作の主体は「弟」である。弟が恋ひ慕う対象が「誰」なのかを考えれば、大意の上から「親」という解答に思い当るであろう。現代語とはやや違った印象の「この人」という表現だが、話し手にとって近い事物をさす、というのが本義であるから、現代の小説の他の文などとは違った語りの文体ならではの表現といえよう。

問4 傍線部を具体的に内容説明する問題。こういう問では、傍線部を品詞分解して問題点を見つけるところからはじめ、指示内容を見つけることができたなら大意を訳し、次いでそれを説明の形式に変える、といった手順で解答へ近づいてゆくのである。傍線部(6)を品詞分解すると、「そ／の／しるし／を／得／たり」と分解される。「そ」の指示する内容は、直前の「紫苑」である。傍線部にあてはめると「紫苑のしるし(＝ききめ)を得ることができた。」となる。「紫苑のききめ」とは何だろうか。文脈をたどって考えてみると、前の行で「兄はく忘れ草を植えて、そのしるしを得たり。」とあるから、同じ構文で対照的な内容を表現しようとしていることがわかるであろう。「紫苑のききめ」とは、「亡き親を忘れないこと」である。二十字以内という字数で調整すれば解答となる。

問5 文法上の誤りがあつたら正す問題。こういう問題は、まず品詞分解し、活用形、活用の種類、接続、仮名遣い、などといった点で誤りがないかどうかチェックする。傍線部(7)を品詞分解すると、「植ゑる／べからぬ／草／なり」となる。動詞「植ゑる」は助動詞「べし(＝べから)」につづくので、接続のきまりに従えば終止形のはずである。ところが、古語には「植ゑる」という形はなく、「植う」が正しい終止形である(ワ行下二段活用)。この点を正しく書き改める。以下「べから(助動詞「べし」の未然形)＋「ぬ(助動詞「ず」の連体形)＋「草(名詞)」＋「なり(断定の助動詞・終止形)」とすべて正しいので、「植うべからぬ草なり。」が正しい形で正解となる。

問6 本文の内容解釈問題。①は、「鬼」が弟に対して何をしてやったか、つまり、「鬼」の行為について答えるのに対し、②は、「鬼」が何に感動して弟へそのような行為をしたのか、つまり、「鬼」の行為の原因・理由について答える問題である。

①は14行目の、鬼自身による会話体の部分と、15行目の、鬼の言葉が実現した部分とをまとめればよい。14～15行目の、「日のうちのことを、さとることあり。く夢をもちて示さむ。」「日のうちにあるべきことを、夢に見ることおこたりなし。」から、「日のうち(＝当日)」のことを、「夢をもちて示(＝夢で予告)」してやった、という解答が浮かぶ。

②は12～13行目の、鬼自身の言葉による行為の理由説明の部分に注目する。「そこは、紫苑を植えて、またそのしるしを得たり。心ざしねんごろにして、あはれぶ所すくなくならず。」鬼は、弟に夢の中で当日の出来事を知らせることにした理由をこう述べているのである。「お前(＝弟)は、紫苑を植えて(亡き親を忘れずにいられるという)結果を得た。(お前の親への)思いは心がこ

もっていて、深く感動せずにはいられない。」この部分を、②の設問文で要求されている形式「何に感動してゝしたのですか」に合わせて体言でまとめると解答になる。

《補充問題》

現代語訳

問1

A 私の髪は年をとって白くなり、白川の水を自分で汲むほどに落ちぶれてしまったことであるよ

B

春霞がたなびいている山に咲く桜の花のように、何度会っても見飽きることのないあなたであることだよ

C

(私のことを) 忘れまいという言葉はどうなってしまったのだろうか。あてにさせていた最後には(私への) 恋心が冷め

きって、秋風の吹く季節になってしまった

D

ますます遠くなっていく(都の) 方が恋しいのに、うらやましいことに帰っていく波であることだよ

解答

問1

(1) ぬばたまの

(2) 春がすみたなびく山の桜花 / 「見れども飽かぬ」に係る。

(3) あき / 「飽き」と「秋」が掛けられている。

(4) 「うら(浦)」と「かへる(返る)」が「波」の縁語となっている。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--

不許複製